

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

ウメサオ・スタディーズの射程

A Perspective of Umesao Studies

2. 研究代表者氏名

田中雅一

Masakazu TANAKA

3. 研究期間

2015年04月 - 2018年03月 (3年度目)

4. 研究目的

本研究は、人文科学研究所と国立民族学博物館を拠点に独自の学問を確立した梅棹忠夫(1920-2010)の可能性を、著作集やそれ以外の公刊、未公刊資料をもとに、主として文化人類学の視点から考察を深めることを目的とする。自選の中央公論新社の著作集に収められていない文献は多岐にわたる。とくに論争に関わるような文献は含まれていない。これに加え座談会や対談も著作集にはおさめられていないが、梅棹の考えを包括的に理解するには無視できない。とくに注目したいのは人文科学研究所に所蔵されている研究会の膨大なテープである。これら进行分析することで、いままで側近の研究者たちによって描かれてきた梅棹の学問像に新しい視点を提示し、今後の研究へと展開するための礎としたい。また、彼の同僚による仕事にも注目する。本研究は、国立民族学博物館と緊密な連携を取りながら研究を進める予定である。

This three-year long project focuses on the works of the late Tadao UMESAO and his colleagues. Although Umesao's major articles and books are found in his collected works published by Chuokoron-shinsha, there are still many published articles not included in the above collection. We will also study his dialogues and discussions with other academics published in books and journals. The Institute for Research in Humanities has numerous recorded tapes of his seminars, and this project is the first attempt to analyze them in a systematic way. In addition, we will try to understand the mutual influences among Umesao and his colleagues. This project will be developed in close collaboration with the National Museum of Ethnology,

where Umesao became Founding Director in 1974.

6. 研究成果の概要

梅棹に関する重要な視点はオラリティとアーカイヴである。後者については「みやこの学術資源プロジェクト」と連携する活動に重なるが、前者はなラティヴについてのシンポジウム「共同体を記憶する——ユダヤ/「ジプシー」の文化構築と記憶の媒体」を7月に、「証言・告白・愁訴——医療と司法における語りの現場から」を11月に開催した。両者とも公刊を念頭に編集中である。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

コンタクト・ゾーン9号と10号にシンポジウムの成果を公表予定。